

西村佳哲著「自分の仕事をつくる」ちくま文庫、筑摩書房 2009年2月10日刊を読む

自分の仕事をつくる

1. 目の前の机も、その上のコップも、耳にとどく音楽も、ペンも紙も、すべて誰かがつくったものだ。街路樹のような自然物でさえ、人の仕事の結果としてそこに生えている。
2. 教育機関卒業後の私たちは、生きている時間の大半をなんらかの形で仕事に費やし、その累積が社会を形成している。私たちは、数え切れない他人の「仕事」に囲まれて日々生きているわけだが、ではそれらの仕事は私たちになにを与え、伝えているのだろう。
3. たとえば安売り家具屋の店頭に並ぶ、カラーボックスのような本棚。化粧板の仕上げは側面まで、裏面はベニヤ貼りの彼らは、「裏は見えないからいいでしょ？」というメッセージを、語るともなく語っている。建売住宅の扉は、開け閉めのたびに薄い音を立てながら、それをつくった人たちの「こんなものでいいでしょ？」という腹のうちを伝える。
4. やたらに広告頁の多い雑誌。10分程度の内容を1時間枠に水増ししたテレビ番組、などなど。様々な仕事が「こんなものでいいでしょ」という、人を軽くあつかったメッセージを体現している。それらは隠しようのないものだし、デザインはそれを隠すために拓かれた技術でもない。
5. また一方に、丁寧に時間と心がかけられた仕事がある。素材の旨味を引き出そうと、手間を惜しまずつくられる料理。表には見えない細部にまで手の入った工芸品。一流のスポーツ選手による素晴らしいプレイに、「こんなもので」という力の出し惜しみはない。
このような仕事に触れる時、私たちは嬉しそうな表情をする。なぜ嬉しいのだろう。
6. 人間は「あなたは大切な存在で、生きている価値がある」というメッセージを、つねに探し求めている生き物だと思う。そして、それが足りなくなると、どんどん元気がなくなり、時には精神のバランスを崩してしまう。
7. 「こんなものでいい」と思いながらつくられたものは、それを手にする人の存在を否定する。とくに幼児期に、こうした棘に囲まれて育つことは、人の成長にどんなダメージを与えるだろう。
8. 大人でも同じだ。人々が自分の仕事をとおして、自分たち自身を傷つけ、目に見えないボディブローを効かせ合うような悪循環が、長く重ねられている気がしてならない。
9. しかし、結果としての仕事に働き方の内実が含まれるのなら、「働き方」が変わることから、世

界が変わる可能性もあるのではないか。

- 10．この世界は一人一人の小さな「仕事」の累積なのだから、世界が変わる方法はどこか余所ではなく、じつは一人一人の手元にある。多くの人が「自分」を疎外して働いた結果、それを手にした人をも疎外する社会が出来上がるわけだが、同じ構造で逆の成果を生み出すこともできる。
- 11．問題は、なぜ多くの人がそれをできないのか、ということになるが、まずはいくつかの働き方を訪ねるところから始めてみたい。
- 12．僕はちょうど 30 歳の時に会社を辞めて、自分の仕事をはじめると同時に、働き方について調べる仕事をはじめた。「働き方研究者」という肩書きでいくつもの職場を訪ね、「あなたの働き方について聞かせてください」と、答えに窮しかねない課題について根ほり葉ほり聞いてまわった。
- 13．いいモノをつくっている人は、働き方からして違うはずだと考えたのだが、はたしてその通り。彼らのセンスは、彼ら自身の「働き方」を形づくることに、まず投入されていた。
- 14．素晴らしい仕事も作品も、ある意味で、その結果に過ぎないことがよくわかった。また同時に、それぞれの仕事が彼らにとって、他の誰にも肩代わりできない「自分の仕事」であることを知った。

P9 ~ 13

[コメント]

仕事には、「こんなもんでいいでしょ」というものと「あなたは大切な存在で生きている価値がある」というメッセージを探し求め「丁寧に時間と心がかかけられた」ものがあると指摘は貴重だ。仕事とは何かを考えるよいきっかけがつかめる書。

- 2010 年 7 月 16 日 林 明夫記 -